

畜産基礎技術マニュアル

畜産における鳥獣被害対策

はじめに

(社)山口県畜産振興協会では、山口県の畜産の担い手確保対策促進事業を活用して、若手畜産経営者を集めた勉強会・意見交換会を開催しています。

今年度は、飼料作物生産拡大をテーマとし、鳥獣被害について県の専門家からお話を聞きました。畜舎の飼料を食べたり、荒らす他、飼料作物の被害、さらには飼槽に糞尿を撒き散らすことから衛生面も気になります。

猪、鹿、猿、カラスについて、それぞれの特徴や対策を以下にまとめました。あきらめずに、工夫することが大切になります。また、市町には、鳥獣被害相談センターがあるそうなので、機会を見つけて相談してみることも大切です。被害があることを行政に伝えることも大切です。何も言わないと行政に認識してもらえません。つまり、フェンスなどの補助にもつながりませんので言うべきことはしっかり伝えることが必要です。

平成 21 年 3 月

社団法人 山口県畜産振興協会

社団法人 山口県畜産振興協会

「中山間地で飼料作物生産拡大」

平成21年1月23日

講演

「畜産における鳥獣被害対策について」

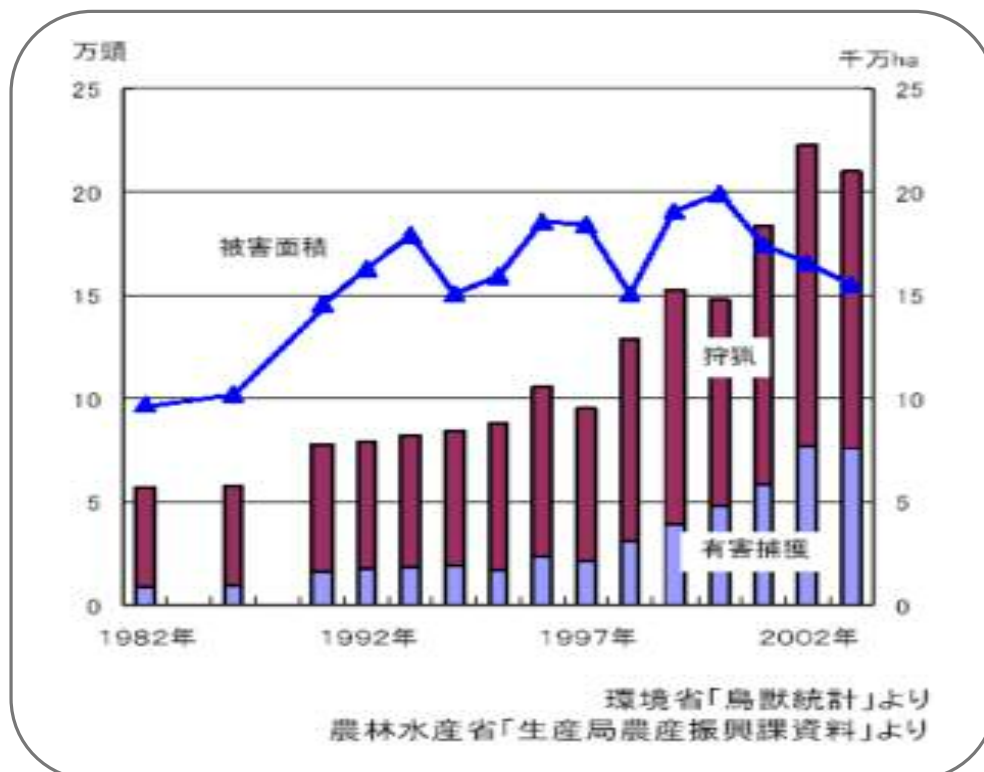
鳥獣被害相談センター 小枝登専門研究員

～イノシシ～

<増加するイノシシ被害>

山口県の鳥獣被害の中で被害金額、面積、ともに最も大きいのがイノシシです。まず、このイノシシについて見ていきましょう。

今現在、イノシシの被害金額の中に畜産への被害金額は含まれていません。畜産への被害とは例えば、イノシシが家畜にかみつくといいた個体への被害、それから飼料袋をイノシシが漁る、といったエサへの被害などがあるかと思いますが、これらの被害は行政の発表するイノシシ被害金額の中に計算されていません。



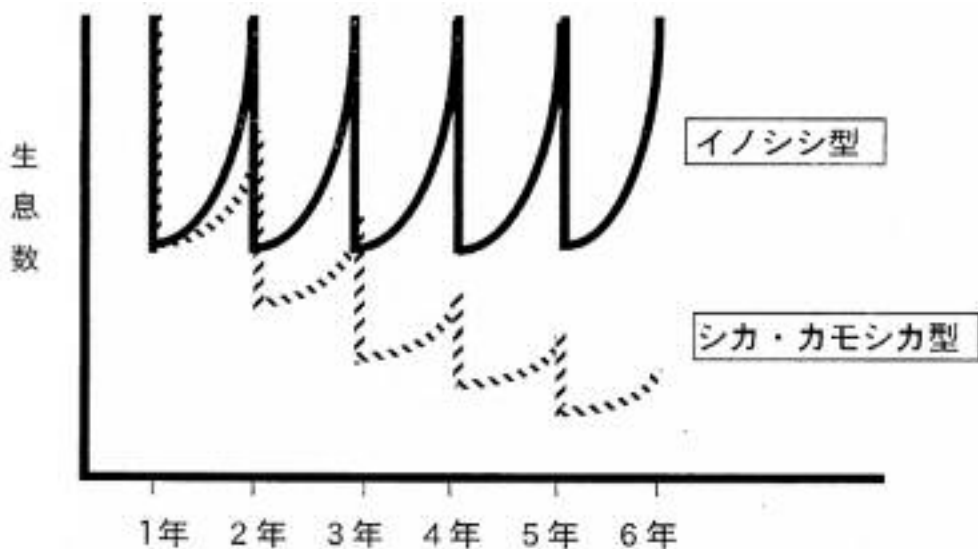
< 捕獲だけではイノシシの頭数は減らない >

イノシシというのは、とても繁殖力の強い動物で、2才から子を産みます。1年に1産、一度に4～5頭、子どもの生存確立は50%以上となっています。これは捕獲によってイノシシの頭数を減らそうとしたときには、半分以上のイノシシを捕獲しなければならない計算になります。半分以上では、一年でまたもとの頭数にまで回復してしまいます。そのため、捕獲だけでイノシシの頭数を減らそうとすることは実に困難なことです。



< 仲谷淳撮影 >

一度に4～5頭の子を産み、毎年2頭は生き残る



生息数の50%を捕獲したときの変化イメージ

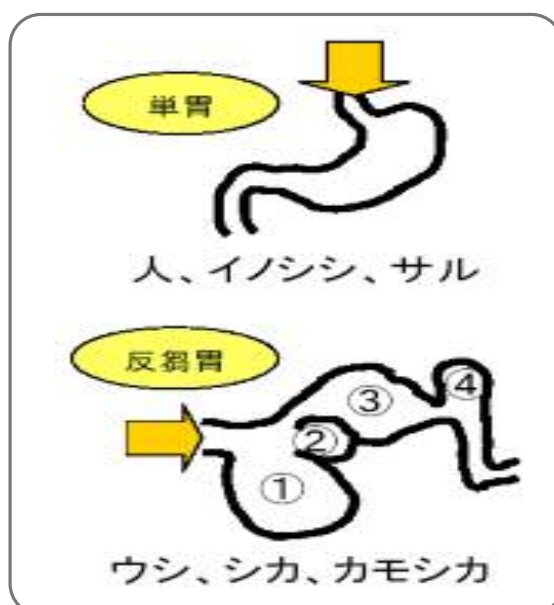
<イノシシは山から下りてくる>

イノシシは一度食べやすいものがある場所を学習すると、何日もそこに来るようになります。農作物を簡単に頂戴できるような農地などがありますと、そこにイノシシは通い続けて、イノシシが山から里に下りてくることにつながります。こうした里のものに依存したイノシシたちは、人間が有効な防除対策を行わなければ、着実に頭数を増やし、それに併せて被害面積も増大していきます。耕作放棄地等のイノシシにとって住みやすい場所も、今どんどん増えていますので、彼らにとって里の周辺というのは非常に繁殖に適した場となってきました。また、里に依存したイノシシたちが増加しているとき、同時に山の中のイノシシたちの数も増えているのではないかと、そういったことを言う人もいます。

イノシシというのはもともと平地で活動する生きものだったのですが、人間が平地を奪って彼らを山に追いやりました。人が追いやったから山に住んでいるだけなのです。実際には彼らは平地で行動するのに適していますので、人が里山の管理や農地の管理を怠ると、イノシシたちはすぐに山から下りてきます。山際に住む人たちの多くが、農地周辺を柵で囲うなどの対策をとっていますが、この柵の裏側の山に面した部分などは管理も手薄でとてもやぶになりやすい場所です。たいていの場合、こういった場所がイノシシの絶好の潜伏場所になっています。放棄地や、こうしたやぶを利用して、里に下りてきたイノシシたちは人家のすぐ近くに潜みながら、作物などを食料にして悠々と生活しています。

<胃袋は人間と同じ>

イノシシの胃はウシやヤギとは違って、人やサルと同じ一つの胃です。そのため、雑食ではあるのですが、彼らの好物は食べやすい穀物の類です。



<エサ場の近くから動かない>

イノシシはどのくらい動くのかということ調べたデータがありますが、これを見ますと、イノシシが思ったほど動いていないことが分かります。アメリカのイノシシの行動範囲は347ha、対して日本のイノシシの行動範囲は209haほどです。イノシシという動き回るイメージがありますが、実際にはイノシシは身の回りに食料さえあれば、それほど動こうとはしない動物であるということが分かっています。下手をすると1km²ほどの行動範囲しか持っていないということもあります。先ほどのデータでは、作物依存の強い日本のイノシシの方がはるかに行動範囲が狭いことが分かります。

以前監視カメラを仕掛けてイノシシの行動観察をしたことがありまして、そのときに面白い行動が観察できました。そこはナシ園だったのですが、観察してみるとどうやらイノシシは毎日決まった時間にナシ園に出入りしているということが分かりました。毎日決まった時間に来て、決まった時間に出ていきました。非常に興味深い行動です。

また、ナシ園に侵入したイノシシは摘果したナシを食べていたのですが、そのために栄養豊富でまるまると太っていました。摘果したナシはもともと捨てるものですので、農家さんの方でも片づける手間が省けてちょうど良いやと放っていました。実害はないので問題はないと思っても、栄養豊富になった結果、生息するイノシシの頭数が増えてしまえば被害面積もおそらく増加しますので後々問題の種になると思われます。

成獣雌の行動圏(ヘクタール)

調査地域	タイプ	期間(月)	行動圏
南カロライナ	野生ブタ	3~10	437
テネシー	雑種	夏(約3ヶ月)	347
テネシー	雑種	冬(約7ヶ月)	266
日本	イノシシ	12	209
南カロライナ	野生ブタ	12~27	178
ハワイ	野生ブタ	5~17	112
カリフォルニア	野生ブタ	7	67

仲谷 1994資料より

<分かりやすいイノシシの痕跡>

イノシシの痕跡、生活痕は山のあちこちから見つけることができます。又夕場や、泥落としの木など、探せばすぐに見つけることができるでしょう。

イノシシの生活痕跡



糞

親指大の粒が固ま
った形をしている
＜仲谷淳撮影＞



足跡

偶蹄類のため、左右対称
の蹄のあとを残す
＜仲谷淳撮影＞



又夕場

しめった粘土質土壌の
場所で泥浴びをする
＜仲谷淳撮影＞



泥こすり木

又夕場近くにある木などに
体をこするため、泥が付く
＜仲谷淳撮影＞

<肉資源としては最高の生き物>

イノシシに対してどんな対策が有効なのか、ということですが、いくら捕獲してもそれだけではそう簡単に頭数は減りません。併せて狩りもしなければとても頭数制限の出来る動物ではないのですが、近年では悪いことに猟友会の高齢化も進んでいます。このことも考慮に入れて、捕獲と同時に何か防除の出来る策を考えなければ有効な対策とはならないでしょう。しかし、肉資源として考えたときには、逆にこれほど良い動物はいないわけです。イノシシは害獣であるとともに、考えようによっては最高の肉資源ですので、捕獲して利用しながら、頭数を減らしていく仕組みが有効だろうと思います。



焼肉

<仲谷淳撮影>



カレー

<仲谷淳撮影>



炒め物

<仲谷淳撮影>



加工品(ソーセージ)<仲谷淳撮影>

<さまざまなイノシシ防護柵>

・ トタン板

いろいろな防護柵について見ていきましょう。

まず、トタン板ですね。大多数の人たちがこれを利用しています。トタンの良い点は向こう側が見通せないことです。向こう側が見えてしまい、そこに食料があることがイノシシにばれますと、彼らはどうしても向こう側に行こうとします。イノシシは1mぐらいの跳躍ができますので、その気になればたいいのトタンの高さはひらりと超えてしまいます。ところが、向こう側が見えさえしなければそこまでして超えようとはしません。トタンを張る最大の防除効果というのは実はここにありまして、物理的にイノシシの進入を防ぐと言うよりは、視界を遮ってしまうことで、彼らの“進入したい”という気持ちを抑えつけてしまう点で優れています。



トタン <仲谷淳撮影>

最も広く利用され、地域によって効果が認められるが、飛び越える、押し倒す、持ち上げるなどして侵入されることも多い。傾斜地やイノシシが乗り越える場合は2段にする。

・ シート

シートも向こう側を隠してしまうという点で防除効果が期待できます。これは山口県ではあまり見かけませんね。



シート <仲谷淳撮影>

シートの下から簡単に侵入されることが多い。強度が弱いことも難点である。

・漁網

漁網については利用に注意が必要です。漁網というのは、塩分を豊富に含んでいます。塩分というのは草食獣の好物ですので、この漁網が噛み切れるような代物であれば、イノシシたちは食べてしまいます。



ネットや漁網 <仲谷淳撮影>

外側にたらしして設置されるが、食い破る場合がある。補強、または踏切場所をなくすため、2重にしたネットの外側を斜めに垂らすのもよい。魚網は、漁協から分けてもらえれば、安価に設置できる。視覚的な遮断効果がないため、農作物が外部から見える。

・有刺鉄線

有刺鉄線は強固ではあるのですが、この棘はイノシシにとってはなんでもありません。まるで痛くもかゆくないのです。ですので、線の間幅がありますと、イノシシはそこから体をねじ込んで進入してしまいます。ですから利用してもあまり効果はないと思います。もしどうしても利用するのだということであれば、幅を狭くするくらいしかないと思います。



有刺鉄線 <仲谷淳撮影>

毛があり皮の厚いイノシシにとって、とげは余り効果がなさそうだ。写真は、有刺鉄線についてのイノシシの剛毛。

・ ワイヤーメッシュ

ワイヤーメッシュは強固で良いのではないかとされていますが、これは目が大きいものになりますとうり坊ならするりと入ってきてしまいます。ですからこれもちょっと注意が必要ではないかと思います。



強度があり、効果も認められるが、視覚的な遮断効果がない。一般に市販されている規格の高さ(1m)ではイノシシが飛び越えることもある。編み目が大きすぎると幼獣が通り抜けるので注意したい。

ワイヤーメッシュ <仲谷淳撮影>

・ 電気柵

電気柵は非常に有効な防除柵となります。ただイノシシについては鼻に当たったときにしか効力はありません。体毛にはいくら触れても電流は流れません。イノシシの鼻が通電線に触れるように設計されると良いと思います。



効果が高いが、維持管理を怠ると侵入される。漏電しないように、除草しておくことが肝心である。幼獣がくぐり抜けないう、電線の高さや間隔を考慮しておく。

電気柵 <仲谷淳撮影>

注意：高さや強度等は被害状況に応じて柔軟に対応

・ 忌避物質

よく忌避物質の利用ということが言われていたりしますが、イノシシの嫌う臭いの利用ですね、例えば木酢液であったり、ライオンの糞であったり、これについてははっきり言ってあまり効き目はありません。効果が無いわけではないのですが、それは一時的なものでイノシシたちもすぐに慣れてしまい、無視するようになります。ライオンを見たことがないわけですから、猛獣の臭いに一時的にひるんだとしても実害がないことが分かると、気にしなくなります。

・ 牛の放牧

牛の放牧による獣害回避効果ですが、これは放牧に伴う電柵の設置、採草行動による見通しの改善、牛のような大動物がいること、どれが決め手かははっきりしないのですが、確かに獣害を軽減する働きは認められるようです。

<自分たちの近くをしっかりと守る>

柵の設置では地域ぐるみの取り組みも必要ではないかと考えています。みんながそれぞれ好き勝手に柵を設置していたのでは、イノシシの進入を許してしまうようなすき間も多く出てきて効率が悪くなります。また、見た目もよろしくありません。近隣の山際からのイノシシの進入を防ぐために、山近くに住む住人同士よく相談しあって柵の効率的設置をする必要があります。

イノシシは通常、決まったルートを動く習性があります。いつも決まった獣道を彼らは利用しています。その獣道を見つければ、ハコ罾を仕掛けるのにも、柵を設置するのにも防除効果が全く違ってきます。獣道を把握していることが、イノシシ被害を軽減させることにつながります。

どのような柵の設置をすればイノシシの進入を防げるのかということですが、自分の近くをしっかりと守る、これが大切になってきます。先ほどお話ししましたように、被害を出すイノシシというのは山奥からはるばると来るのではなく、集落のごく近く、人家や農地の目と鼻の先に潜伏しているものです。ですから、いたずらに遠いところに柵を置くのではなく、自分たちの近くをしっかりと守って下さい。

イノシシだけに限りませんが、獣たちはみんな山から来ます。山際の住人たちが、しっかりと防ぐ、また協力し合って防ぐことが重要ではないでしょうか。

イノシシ対策の最大のポイントは3つです。獲る、防ぐ、近づけない環境管理、となります。山と農地、里と山、この境界の管理をしっかりとやって作物周辺にやぶなどの潜伏場所を設けないようにすることが大事です。

～ニホンジカ～

<シカの被害も増加している>

ニホンジカは、以前は絶滅が危惧されるような動物だったのですが、近年では頭数が増加し、生息地も拡大して広範囲にわたって生息するようになりました。年々被害も増加しています。

シカは1年に1産し、一度に1頭の子を産みます。妊娠率は高いと言われているものの、生まれるのが1頭だけですので、捕獲することによって比較的容易に頭数を制限することが可能です。



<小泉透撮影>

一度に1頭の子どもを産む

<シカは何でも食べる>

シカは毒草以外、ほとんど何でも食べる動物です。中でもイネ科の植物を好物としており、冬場利用されることのない田んぼなどはシカにとって絶好のエサ場です。冬の田んぼにシカが集まってきて草を食べているという事例をよく耳にします。木の皮も食べますので、シカの害としてよく挙がるのがヒノキの食害です。面白いことに、ヒノキの野良苗は食べません。野良苗は食べないのに、人が植えた苗はスギでもヒノキでもよく食べます。おそらく肥料をいっぱいやって育てた人工苗はおいしいのでしょう。自然状態では、北日本のシカはササを、西日本のシカは木の葉をよく食べると言われています。

◇シカはウシと同じ反芻動物。
◇さまざまな植物をエサにし、その数は1千種を超える。



<小泉透撮影>

牧草は大好物



<堀野真一撮影>

新植地ではヒノキが食害される



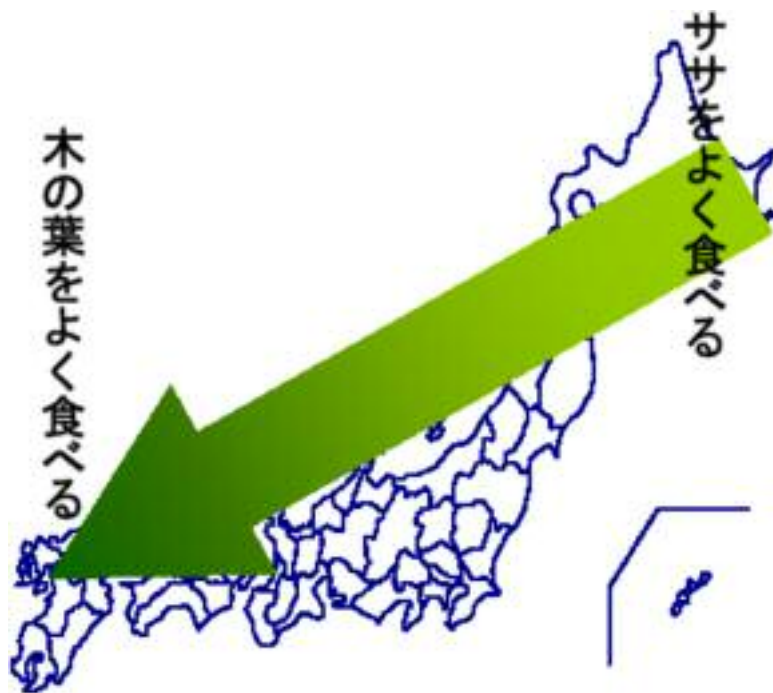
<小泉透撮影>

イネも好んで食べる



<小泉透撮影>

ササは北日本のシカの主食
(シカの採食でササが消えてしまった自然林)



地域によって食性が変化する

<シカは臆病だが大胆>

シカは臆病な動物ですので、人の姿を見かけるとすぐに逃げます。車が近づいても逃げようとしませんが、人が車から降りた途端にすごい勢いで逃げていきます。しかし、人が近くにいても危害を加えられないことを学習しますと逃げなくなります。

シカの柵は1.2mほどの高さのものが一般的です。シカはその気になれば助走なしで2mの高さまで飛びます。ですがシカの進入を許してしまったケースの多くは、飛び越えられたのではなく、アンカーが甘くてたるんでいるところからの侵入です。ほとんどの侵入はもぐり込みや、すき間からの侵入となっています。

<シカの痕跡>

シカの生活痕は、食害や木の痕になります。

シカの痕跡、シカの被害



足跡

偶蹄類のため、左右対称の半月様の蹄跡が残る <小泉透撮影>



枝葉採食害

上顎に前歯が無いので、摘み取ったような食べ跡になる <小泉透撮影>



糞

米俵のような形をしている <小泉透撮影>
カモシカと異なりタメ糞をしない



剥皮害

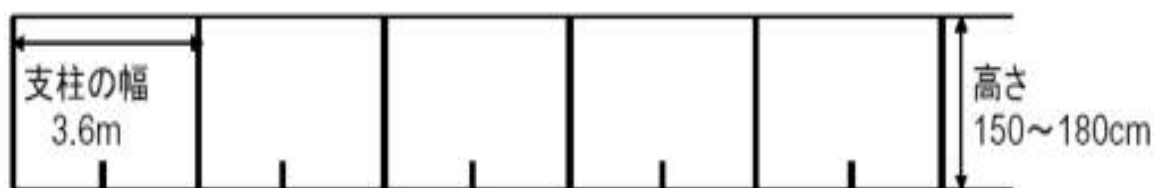
樹皮を食べる場合とオスが繁殖期に角をこする場合とがある <小泉透撮影>

<シカの防護柵>

シカの防護柵としては、シカネットというものがありまして、一般にこれが一番良いと考えられているようです。これは本当を言えば2 m以上の高さが欲しいところなのですが。アンカーがしっかりとしていれば、通常はこのシカネットを破壊してまで侵入してくるということはありません。しかし人に追われたり、犬に吠えられたり、必死で逃げているときのシカは、このようなネットはわけなくぶち壊します。そうでなければ通常は潜り込めるところを探してネットの周りをうろうろしている程度です。

ネット以外ですと、金属フェンスなどもあります。金属フェンスを利用する場合は、高価なものですし位置も簡単には変更できませんので、十分に設置場所を分析しておくことが求められます。ネットでもフェンスでも維持管理にはメンテナンスが必要となります。

1. 一般的な柵の形



ネット柵では支柱と支柱の間にペグを打って下止めする

2. 資材は金属フェンスとネットが多い



<堀野真一撮影>

効果は高いが、設置費用もかなり高い



<小泉透撮影>

シカに食い破られないように鋼心の編みこまれたネットもある



<小泉透撮影>

雪の少ない地方では防風ネットも有効

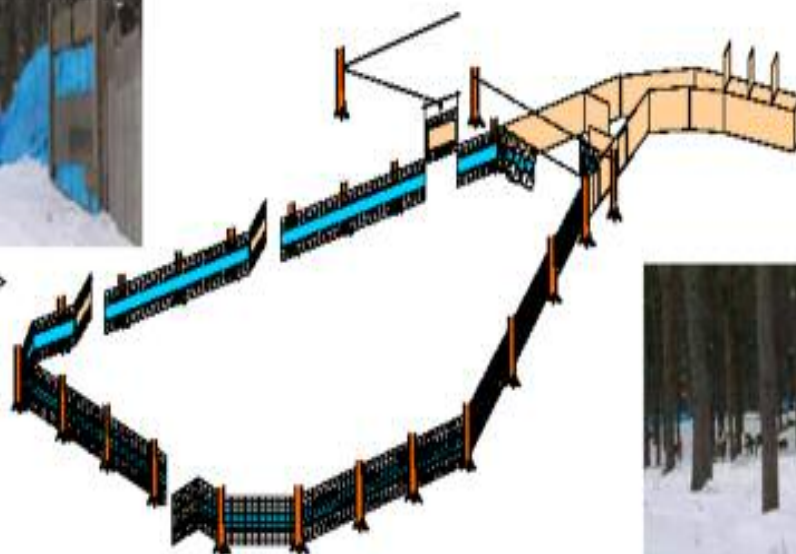
< 捕獲用の仕掛け >

効果的な捕獲方法としては、大きな柵を作っておいてわざとすき間を作り、そこからシカを誘い入れるという仕掛けがあります。大きな柵の中にシカが何頭か入り込んだらすき間を閉じて、囲いの奥に設置した罠にシカを誘い込んで捕獲する作りになっています。以前山口県でも一度この仕掛けをやってみたことがあるのですが、すき間を閉じるタイミングというのがなかなか難しく、3頭いたのですが、もたもたしているうちに1頭は逃げてしまいました。

◇秋や冬にシカが集まる地域では、捕獲用の柵にシカを誘引し効率的に捕獲することが可能。



<高橋裕史撮影>



<原図：高橋裕史>



<高橋裕史撮影>

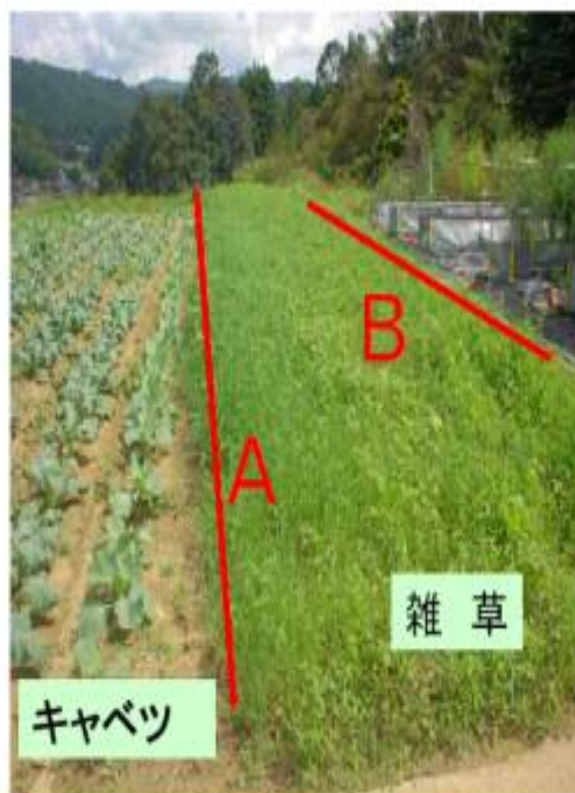
危険な作業をとまなうので専門家の指導のもとに行う。

< 雑草がシカの大好物 >

防除としては、シカを寄せ付けない管理が重要になってくると思います。シカの一番の好物は雑草です。シカは雑草に惹かれて集落までやってきて、雑草を食べるついでに農作物も食べています。ですから、農作物を守ることばかりに気をやって圃場の周りに雑草を残してしまっていては意味がありません。秋にはみなさん草刈りをされるとと思いますが、これをやると冬場にちょうど良い緑の草が出てくるようになります。それがシカを引き寄せているのです。これを解決するには、冬場に草地を生み出すことがないような集落管理が必要となります。収穫後の田んぼなどは絶好のエサ場ですので、できれば収穫後に一度鋤いておかれることをおすすめします。

シカを使った試験では、雑草の繁った畑と、隣のキャベツ畑、どちらによく侵入するかを調べたものがあります。このときよく食べられたのはキャベツ畑ではなく、雑草畑の方でした。要するにシカは作物を食べ荒らしに来ているわけではなく、雑草を食べに来たついでに作物もつまみ食いしている、そういうこととなります。

◇農作物だけを柵で囲っても、緑草が食べられれば餌付けは進む。
◇柵の設置位置や雑草管理への配慮が重要。(Aの位置に設置する場合は、雑草管理が必要。)



<井上雅央撮影>

～ニホンザル～

<サル専用の対策が必要になる>

イノシシ、シカと全く違うのがサルです。彼らがイノシシやシカと全く違うのは、手が使えることです。手が使えますので、柵で防ぎにくい動物です。少々の柵であれば手を使って容易く侵入してしまいます。もし柵を設置するのならサル用のものを利用されると良いかと思えます。

ニホンザルは世界的に見て特殊な生きものです。日本のような寒い地域に生息するサルは他にはいません。ニホンザルはとても寒さに強い珍しいサルなのです。地域によっては、生息しているニホンザルに特別の保護を設けている場合もあります。

山口県にもサルはいっぱいいます。平成15年の調査になりますが、だいたい28～30ほどのサルの群れが確認されています。今はもっと多いかもしれません。被害面積、捕獲頭数はともに横ばいで推移しています。



<大井徹撮影>

地域によって天然記念物に指定されているニホンザル

<ニホンザルの群れは10～100頭規模>

ニホンザルは群れを作って生活します。群れは作りますが、一般的に考えられているようなボスザルは存在しません。飼育状態にある群れでは別ですが、野生状態にあるニホンザルの群れにボスザルはいないということが確認されています。代わりにリーダーの役割を果たすのはメスのサルです。ニホンザルの群れというのは、仲の良いメスのグループが2～3個あり、それが寄り集まる形で構成されています。その中にリーダー的メスグループがあり、このグループのサルが群れの行動を左右しています。

ニホンザルの群れは10～100頭ほどの規模で構成されています。群れのサイズが100頭を超えるほど大きくなりますと、群れの統率がとれなくなってきて分裂します。これは100頭で一緒に動くよりも、50頭のグループになった方がエサを得る確立が上がるためだと言われています。被害対策として、サルの拡散と繁殖、被害地域の増大を防ぐために群れのサイズを現況以上大きくさせないということが重要になります。

群れ同士は微妙にその行動圏を触れあわせており、他のグループとも接することで多様性を維持しているようです。

<サルの痕跡>

サルの生活痕は足跡や、食害などから判別します。山のサルの主食は木の実や昆虫で、メインとなるのは葉っぱです。里の被害が少ないのは山の中にドングリやクリなどの食料となる木の実が豊富になっている頃です。



<大井徹撮影>

サルの足跡（大きさから年齢が判別できる）

< 作物を食べているサルは繁殖力が強い >

オスは成長すると生まれ育った群れを離れ、新しい群れを見つけて、そのまわりをつかず離れずうろうろとうろつく生活をするようになります。群れ離れをする年齢は4才頃と確認されています。メスは生まれた群れでそのまま一生を過ごします。

ニホンザルの初産は7才頃、それから2～3年に1産するようになります。子どもの死亡率は30～50%で、頭数はなかなか増えないのが通常です。しかしこれは山のサルの場合の話で、餌付けされたサル、農地に依存しているようなサルの場合ですと、高栄養のものを摂取していますので3才で初産、1年で1産、子どもの死亡率20%以下という大きな変化があらわれます。このときサルの頭数が増加する可能性はかなり大きいと言えます。

ニホンザルの繁殖

山のサル

初産年齢: 7-8歳程度

出産間隔: 2-3年

赤ん坊の死亡率: 30-50%程度

餌付けザルと農作物を食害するサル

初産年齢: 4-5歳程度

出産間隔: 毎年出産

赤ん坊の死亡率: 20%以下

<サルが集落に出てくるのは学習の結果>

サルはもともと森林性の生きものですので、イモのような地面に埋まっているものを掘り返して食べるような習性は持っていません。以前は森の中で採れるものだけを食べて暮らしていたので、集落に出てくることもありませんでした。今、ニホンザルが集落に次々と現れるというのは学習の結果です。畑に埋まっているものは食べられるのだということ、集落に落ちているものはおいしいのだということをサルが学んだのです。

ですからサルの生息地は山の近くです。イノシシ、シカと同じく、山から農地に出てくるのを防ぐことが重要になります。行動圏は山のサルで300ha、農地依存のサルの場合で20haほどとなっています。

<サル対策>

・猿落くん

サルネットとしては猿落くんというものがあります。これはサルが侵入しにくい構造になっていまして、防げるわけではないのですが時間をかせぐことが出来るという作りになっています。サルが猿落くんにひっかかってもたもたしている間に人がやってきてサルを追い払うことが必要です。そして、人間に追い払われるという怖い体験を学習させることによって、人里は怖いものなのだと認識させます。

・ロケット花火

サルを追い払うときに一番重要になるのが、集落の怖さをサルに教えるということです。この点、ロケット花火というのは簡単でしかもかなり効果が期待できるサル対策です。ロケット花火ならサルだけでなく、カラスにも効果があります。打ち上げ花火なども有効でしょう。花火の利用で火事になるのではないかと心配になると思いますが、打ち上げ花火の使用で火事になる可能性があるのかどうか、わたしどもで試験をしました。その結果、火の粉は地上に達する前に全て消えてしまうことを確認しました。おそらく安全性は問題ないだろうと思います。

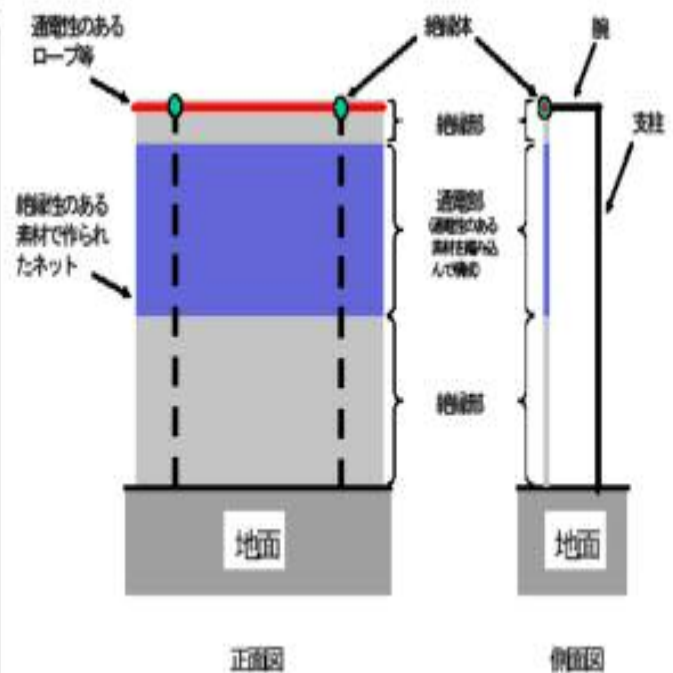
・ モンキーショック

新開発のサルネットとして、モンキーショックというものがあります。これはわざとサルが登りやすいように作ってあるもので、登ってきたサルの手が鉄柱の一番上に触れた瞬間に手の+極から足の-極へと電流が流れる仕組みです。これによってサルは驚いて逃げてしまいます。モンキーショックの良い点は、漏電の心配がないということです。サル対策としては非常に期待の持てる代物なのですが、サルにしか通用しないという難点があります。強度としてはそれほどでもないの、シカやイノシシになりますと、持ち上げたりして侵入されるだろうと考えられます。

◇農林水産省の研究プロジェクトで京都大学が開発したネットタイプ電気柵。

◇ネットが支柱から離れていて、サルがよじのぼりにくく、乗り越えようとするときに確実に電気ショックを与えることができる。

ネット型電気柵の概念図



(特許第360396号)

<原図: 室山泰之>

～カラス～

<日本には2種類のカラスがいる>

日本のカラスは、ハシボソカラスとハシブトカラスが主となっています。ハシボソカラスは森林に生息し、ハシブトカラスは農村などに生息しています。どちらも日本全国どこでも見かけることが可能です。大陸から渡ってくるタイプのカラスもいます。このカラスはよく電柱などに留まっているもので、なんだか最近カラスが多いなあと思ったりするときがあると思いますが、そのとき見かけるのが大陸から渡ってくるタイプのカラスです。

カラスには集団で生活する習性があり、雑食で何でも食べます。動物性のものを好んで食べるのはハシブトカラスです。10～20mほどの高さの樹木や鉄塔の上に巣を作り繁殖します。繁殖期には凶暴性を示すこともあり、よく東京などではこの時期に人がカラスに襲われるなどの事件が起きています。2才頃から夫婦で行動するようになります。

カラスによる被害は鳥類の中では特に大きくなっています。鳥類自体、鳥の「飛ぶ」という特性、鳥類の繁殖しやすい環境が増えてきたこと、人間の方で有効な対策を打ち出せていないことによって、その被害は増加しています。



ハシブトガラスは動物性のエサを好む
畜舎の牛をつつくなど被害を出すのもハシブトガラス

<防鳥ネットで畜舎への侵入を防ぐ>

鳥は飛翔能力がありますので、捕獲しても鳥のエサになるようなものが残っていれば、周辺地域からまた集まってきてしまいます。そこでとにかく必要になるのが、圃場にカラスを寄せ付けない対策を採ることです。例えば、作付けを普通よりも深くして簡単には種子をほじくり出せないようにする、作物を防鳥ネットで覆ってしまう、といった対策が考えられます。テグスなども有効です。カラスは羽にテグスが触れることを嫌がりますので、羽が触れる範囲でテグスを設置すると効果的です。

漁網については、イノシシのときには食べられてしまうのであまり良くないという風に言いましたが、防鳥ネットとして考えると目が小さくスズメすら入れないのでかなり有効です。牛舎では垂らし方が悪いとウシの口に届いてしまい食べられてしまいますので注意が必要です。漁網は漁協からもリサイクルして使って欲しいという要望が大きいので比較的楽に手に入ります。ただ、漁協の方もタダで処分したいという下心がありますので、きちんとした利用の計画が立っていない場合は、安易にはもらわない方が良いでしょう。あれは自分で処分すると大変です。

畜舎の上に漁網で防鳥ネットを張るときは、底引き網のような重いものではなく、マナガツオ網のような軽いものを用いると良いでしょう。それぞれの網の特性を簡単に説明しますと、サワラ網は果樹園の防鳥ネットに向いています。ノリ網は獣防止に良いのですが、目が大きいのでうり坊くらいですと通ってしまいます。底引き網は目が細かく丈夫なので、獣にも鳥にも有効です。ただ重量が重く、また利用の前には一度解体作業を行う必要がありますので、扱いが大変です。マナガツオ網は防鳥ネットに良く、かなりサイズの大きい網です。タテ網もかなりの大きさがあり、また魚が中に入って引っかかる仕組みになっていますので、それを利用してサルを引っかけるサルネットとして応用可能でしょう。

<カラスによる被害>

カラスの被害については、エサをついばまれる、糞をエサ箱に落とされるなどあります。この落ちた糞を牛が食べたことで、肺炎にかかるなどの病気が発生しているようです。また、出産後の胎盤や、生まれたばかりの子牛をつつくなどの被害もあるようです。対策としてやはり畜舎に防鳥ネットを仕掛ける必要があるでしょう。